



堆肥を高速で乾燥できるシステムを導入したハウス(JA菊池有機支援センター合志)

全国初 RPFで堆肥効率化

堆肥効率化に再生資源燃料
(RPF)ボイラー導入

堆肥の水分調整の短縮で
広域での構築連携を拡大

効率的なペレット堆肥製造に向け、全国初の低コスト・短時間で堆肥の乾燥ができるシステムを導入しました。令和4年にJA菊池と農研機構や東京大学などと共同でコンソーシアムを立ち上げて実証を進めています。再生資源燃料(RPF)を使うボイラーを活用したシステムの実演会を8月2日、有機支援センター合志で開きました。

実演会には、JA関係者や九州農政局など44人が参加。東組組合長が「本システムにより、地域の持続可能な農業・食料システムの構築に良い効果をもたらすことを期待する」とあいさつしました。農研機構九州沖縄農業研究センターの田中章浩氏は「地域の畜産・酪農家が抱える堆肥処理問題に実効性のある解決策として取り組んでいきたい」と話しています。

RPFを利用することで、これまで3カ月以上かかっていた堆肥の水分調整を数日に短縮でき、広域での耕畜連携を拡大することができます。全国で偏在する堆肥を広域で流通させるには、持ち運びや散布の作業性に優れるペレット化が重要で、今まで堆肥の水分調整に時間がかかることが課題となっていました。

このシステムでは、ハウス内専用レーンを設けて堆肥を乾燥。ボイラーで温めた温水を使い、レーン下の放熱器から温風を発生させて攪拌しながら乾かします。水分をペレット化に適した30%以下に調整する工程は、従来のハウス内での天日乾燥で約3カ月かかるところを1日に短縮。従来の通風乾燥で約1週間かかっている仕上げ乾燥の工程も短縮できる見込みで、今後実証を進める中で効果を計測していきます。

※RPFとは、再生利用できない古紙や廃木材などを混合し加熱・成型を行い、燃料にしたものです。化石燃料より安価で、燃焼時の環境負荷も低減できます。堆肥の水分測定には、低コストな堆肥埋込み式を使います。

農業振興協定 JA菊池・JASM・大津町・菊陽町

半導体製造企業JASM・2町と 農業振興に関する協定締結式

白川中流域等における水稲作の推進及び農業振興に関する協定締結式が8月2日、熊本県庁で行われました。

半導体製造企業であるJASM取締役社長堀田祐一氏、菊陽町長吉本孝寿氏、大津町長金田英樹氏、JA菊池代表理事組合長東哲哉氏が、協定書への署名をし、各機関が一丸となり地下水保全及び農業振興に取り組むことを誓いました。

東組組合長は「安全安心な農産物を生産するとともに、水稲作による地下水涵養・環境保全に取り組んでいきたい」と話し、堀田社長は「水稲作が継続していけるよう、できる限りの責務を果たす」と話しました。

※JASMの社員食堂では、4月から地元農家が栽培した米を使用しています。年間60トン以上の購入を見込んでいます。また、社員向けの地元農産物の販売も週1回おこなっています。田植え交流も行い、秋には稲刈り交流も予定しています。



協定書への署名後の写真撮影

左から、
熊本県環境生活部 小原雅之部長(立会人)
菊陽町 吉本孝寿町長 JASM 堀田祐一社長
JA菊池 東哲哉組合長 大津町 金田英樹町長